

キリスト教シオ ニズムと私たち

①源流と発展

17～19世紀のイギリスを
焦点に



米軍の戦闘部隊司令官が下士官らに対し、イランへの戦争は「神の神聖な計画」の一部だと語り、ドナルド・トランプ大統領が「イエスによって選ばれた」存在としてアルマゲドンを引き起こすと主張したという。軍隊における宗教的自由財団に提出されたこの苦情は、少なくとも30カ所の基地にわたる40以上の部隊から48時間以内に110件以上が記録された



イラン攻撃は「神の計画」

酔いしれるトランプ派キリスト教シオニスト！



シオニズム、キリスト教シオニズムとは何か

- シオニズムとは「離散した世界のユダヤ人をシオン(エルサレム)に集め、「ユダヤ人の民族的郷土(ユダヤ人国家)」を建設する世俗的政治運動である。
- キリスト教シオニズムとは、理由は何であれ、無条件にイスラエル国とその行動を支持するキリスト者のことである。→イスラエル軍＋米軍のイラン攻撃

パレスチナの現状ーシオニズムの何が悪いのか

- ジェノサイド
- ドミサイド(住宅やインフラの破壊)
- 土地の強奪…入植型植民地主義
- アパルトヘイト(隔離壁)・レイシズム
- 「ユダヤ民族」についての神話を捏造
- 旧約聖書(ヘブライ語聖書)の悪用
(神への冒瀆)
- 人権と人命の軽視
→入植型植民地主義



パレスチナの土地



キリスト教 シオニズムの到達 点

①ユダヤ人が今もなお神の選民であるという信念から、キリスト教シオニストは、物質的にイスラエルを祝福しようとしている。その結果必然的にメディアやイスラエルへのツアーを通じてイスラエルのレイシスト・アパルトヘイト政策を無批判的に承認している。

②神の選民として、ユダヤ人の最終的イスラエル帰還を、キリスト教団体とユダヤ機関の間のパートナーシップを通じて奨励・促進している。

③聖書に記されているようにエレッツ・イスラエルは排他的にユダヤ人に属するのであって、その土地は併合され、植民が強化されなければならない。

④エルサレムはユダヤ人の恒久的・排他的都であり、パレスチナ人と分かち合うことはできない。

⑤第三神殿を建設し、祭司を聖別し、犠牲を復活しなければならない。

⑥キリスト教シオニストは近い将来善と悪との黙示的な戦争があると信じているため、ユダヤ人とアラブ人の間の恒久平和の展望はないと信じている。実際、イスラエルがイスラムと妥協すべきだとか、パレスチナ人と共存すべきだとか説くことは、差し迫ったハルマゲドンの闘いにおいて神とイスラエルに反対することである。

(スティーブン・サイザー『キリスト教シオニズム』)

ユダヤ人 とは...

- 聖書のイスラエルと現在のイスラエルは全くの別物
- ユダヤ人の「離散」の実際

ユダヤ戦争(66-70, 132-35)による壊滅的敗北

- パレスチナの地を追われたのは一部の人々
- 紀元前から、多くのディアスポラ・ユダヤ人
- ヨーロッパの地で集団改宗による「ユダヤ人」の形成(ユダヤ人とはユダヤ教を信じるか、母親がユダヤ人である人々)

アシュケナージ…中央および東欧(イディッシュ語、歴史的に迫害を受けてきた)

セファルディ…西欧およびイベリア半島(ラディーノ語、社会的に同化の方向)

- 多くのユダヤ人はパレスチナに残る→他の諸民族と混淆→現在のパレスチナ人
- イスラム教の到来と征服

(シュロモー・サンド『ユダヤ人の起源』)

- 「民なき土地に、土地なき民を」の嘘

シオニスト到来以前のパレスチナは、民族主義化、近代化の過程にあった。

シオニズムの系譜

◆キリスト教シオニズム(16, 7世紀に遡る)

宗教改革→イギリスのプロテスタント→アメリカの「福音派」(キリスト教ナショナリズム)

◆ユダヤ人シオニズム(力による郷土建設を目指す世俗的政治運動)

非シオン・シオニズム(アルゼンチンやウガンダ)←→シオン・シオニズム
実践的シオニズム→修正主義シオニズム(軍事力の行使)

これまでに 何が起 こったか①

- 1896年 テオドール・ヘルツル『ユダヤ人国家』を出版。
- 1897年 第1回シオニスト会議
- 1905年 第7回シオニスト会議において、パレスチナの地にユダヤ人の「郷土」設立を決議(それ以前には、ウガンダやアルゼンチンなども検討)
- 1915年 フサイン・マクマホン協定(イギリス、アラブ国家の建設を約束)
- 1917年 バルフォア宣言(イギリス、パレスチナにユダヤ人の「民族の故郷」建設を約束)
- 1947年 国連パレスチナ分割決議。ユダヤ人とアラブ人の建国のため土地を分割することを決議。当時ユダヤ人の土地所有は全土の7%だったが、国連案ではユダヤ人国家に55%が割り当てられた。

これまでに 何が起 こったか②

- 1948年5月 イスラエル建国宣言。ナクバ(破局・大惨事)。75万人の難民が発生。キリスト者の60%が「民族浄化」の犠牲に。
- 1967年6月 第三次中東戦争(6日間戦争)。イスラエルが東エルサレム、ゴラン高原、ヨルダン西岸地区、シナイ半島他を占領。歴史的パレスチナ全体がイスラエルの軍事支配下に。
- 1967年11月 国連安保理決議242号(イスラエルの占領地からの撤退、交戦状態の終結など)
- 1987年 第一次インティファダ(ヨルダン川西岸地区、ガザ地区)
- 1993年 オスロ合意。パレスチナ暫定自治政府へ。

イスラエル国は世俗国家

- 当初はシオン(エルサレムのある山)を愛する「シオンの愛運動」として始まったが、やがて、自力で政治的解放を目指す「シオニズム運動」に変質。また、シオニスト運動は、特に東欧やロシアでは社会主義思想の色合いを帯び、ベングリオンなどの社会主義シオニストが主導する「実践的シオニズム」が主流となって、移民や入植地開拓・防衛のために非合法手段をも辞さない運動を展開した。さらに過激な軍事行動を扇動する修正主義者ヤボティンスキーらも現れた。
- 最近では、旧約聖書の語句を恣意的に引用して、自己正当化に用いているが、それはあくまでも政治的目的の飾りに過ぎない。
- 聖書のイスラエルと現代のイスラエル国を同一視したり、延長線上で捉えるべきではない。

Anti-Semitism

反ユダヤ主義とは

- 特に欧米においては、イスラエルの政策や行動を批判することは、反ユダヤ主義あるいは反セム主義(ユダヤ人はセム族とされている)として逆に非難され、封じ込められることがしばしばある。ホロコーストをもたらし、あるいはそれを許してしまった事実に対する罪意識と、さらにキリスト教シオニズムの影響とが結びついて、いかなるイスラエル批判をも封じ込める強力な枷となっているのである。トランプ政権はイスラエルを批判し、パレスチナの人権を守ろうとする運動を禁止している。逮捕者も出ている。
- ホロコーストが引き起こされたのはヨーロッパにおいてであり、その代価を支払わせられているのはパレスチナである。
- ホロコーストの犠牲者は、ポーランド人、ロマの人々、障がい者などの「社会的弱者」を含むが、ユダヤ人だけが問題とされている。
- シオニズムを批判することは、決して反セム主義(人種・民族的概念)でもなく、反ユダヤ主義(ユダヤ人に対する憎悪)でもなく、ましてや反ユダヤ教でもない。

ホロコーストの 資本化

「イスラエル建国」(ナクバ)から第3次中東戦争(6日間戦争)までは、シオニストはホロコーストの犠牲者・生存者を「弱虫」「古いユダヤ人」として軽蔑していた。

6日間戦争の後、シオニストは「ユダヤ人は反ユダヤ主義の犠牲者」というストーリーを広め、政治的に利用するようになった。



キリスト教シオニズムを生みだした背景

政治的・社会的激動

アメリカ独立戦争
(1775-1784)、フランス革命
(1789-1793)

ナポレオン戦争
(1809-1815)

科学技術の発展・
産業革命

思想的・宗教的激動
啓蒙主義・理神論

以上に対する反動
...大覚醒運動、終末論
(千年王国論)

終末における千年王国論とシオニズム

「キリスト再臨の前に地上で神の国が実現される」という思想
古代から論議の的であったが、中世においては異端視されていた。
宗教改革期に再洗礼派やミュンツァーなどにおいて復活。

- 無千年王国論(amillenarianism)…千年王国を比喩的・象徴的に解釈
- 後千年王国論・千年王国後再臨説(postmillenarianism)
- 前千年王国論・千年王国前再臨説(premillenarianism)

世界の終末に実現するキリストの千年間の支配の前に再臨が起こるとする。

それに先だって艱難や携挙の期間があるとされ、「反キリスト」勢力との戦いを耐え忍ばなければならないとする過激な神学思想

ユダヤ復興運動

- 聖書の原典研究・ヘブライ学の発展
- 聖書考古学の発展・聖地への関心(旅行記)

「終末前にはユダヤ人がキリスト教に集団改宗し、パレスチナの地に帰還する」とするユダヤ復興論が生まれた(プロト・シオニズム)

キリスト教シオニズムの主な提唱者

- チャールズ・シメオン(1759-1836)・・・ロンドン・ユダヤ人協会(LJS)の中心人物。後に福音主義グループの「クラパムセクト」と一体になって、CMS(教会宣教協会)を設立。「神の選民の回復」を主張し、CMSのネットワークを通じてインドやアフリカ、アメリカにも影響力。
- エドワード・アーヴィング(1792-1834)・・・スコットランド教会(長老派)牧師。世の終わりとキリスト教世界の背教、ユダヤ人の回復および差し迫ったキリストの再臨を預言。

ディスペンセーション主義の登場

- ジョン・ネルソン・ダービー(1800-1882)・・・1825年にアイルランド教会で叙任されたが、聖公会と非国教教会の双方を背教として批判し、離脱。当時支配的であった後千年王国説の楽観主義に反対。ディスペンセーション主義(天啓史観、経綸主義、契約期分割主義)を唱え、世界中でプリマス・ブレザレン(日本ではキリスト同心会)を設立。1885年には世界で1500の教会が設立されていた。晩年アメリカでの活動が増え、ジェームズ・H・ブルックス、D・L・ムーディ、ウィリアム・E・ブラックストーン、C・I・スコフィールドに影響。→次回のテーマ

ディスペンセーションとは

- 天地創造から終末に至る救済史を、神と人間の関係に従って時代に区分する。
- 字義的・終末論的聖書解釈から、ディスペンセーション(契約期)をいくつかに区分する。区分の仕方は人によって異なるが、スコフィールドは次のように区分する。

無垢の時代→良心の時代→人間の統治の時代→約束の時代→律法の時代→恵みの時代→王国の時代

イギリスの植民地主義的野望との結合

- 第7代シャフツベリー伯爵アントニー・アシュリー・クーパー(1801-1885)は、ユダヤ人のパレスチナへの帰還が聖書に預言されているだけでなく、イギリスの外交政策の戦略的利益に叶っていると考えた。
- オスマン帝国領に、イギリスの庇護のもとで、エルサレムを首都とするユダヤ人の母国を展望。
- 「民なき土地に、土地なき民を」というスローガンをヘルツルに吹き込む。
- シャフツベリー伯の影響を受けた人物が、バルフォアやロイド・ジョージであった。→バルフォア宣言

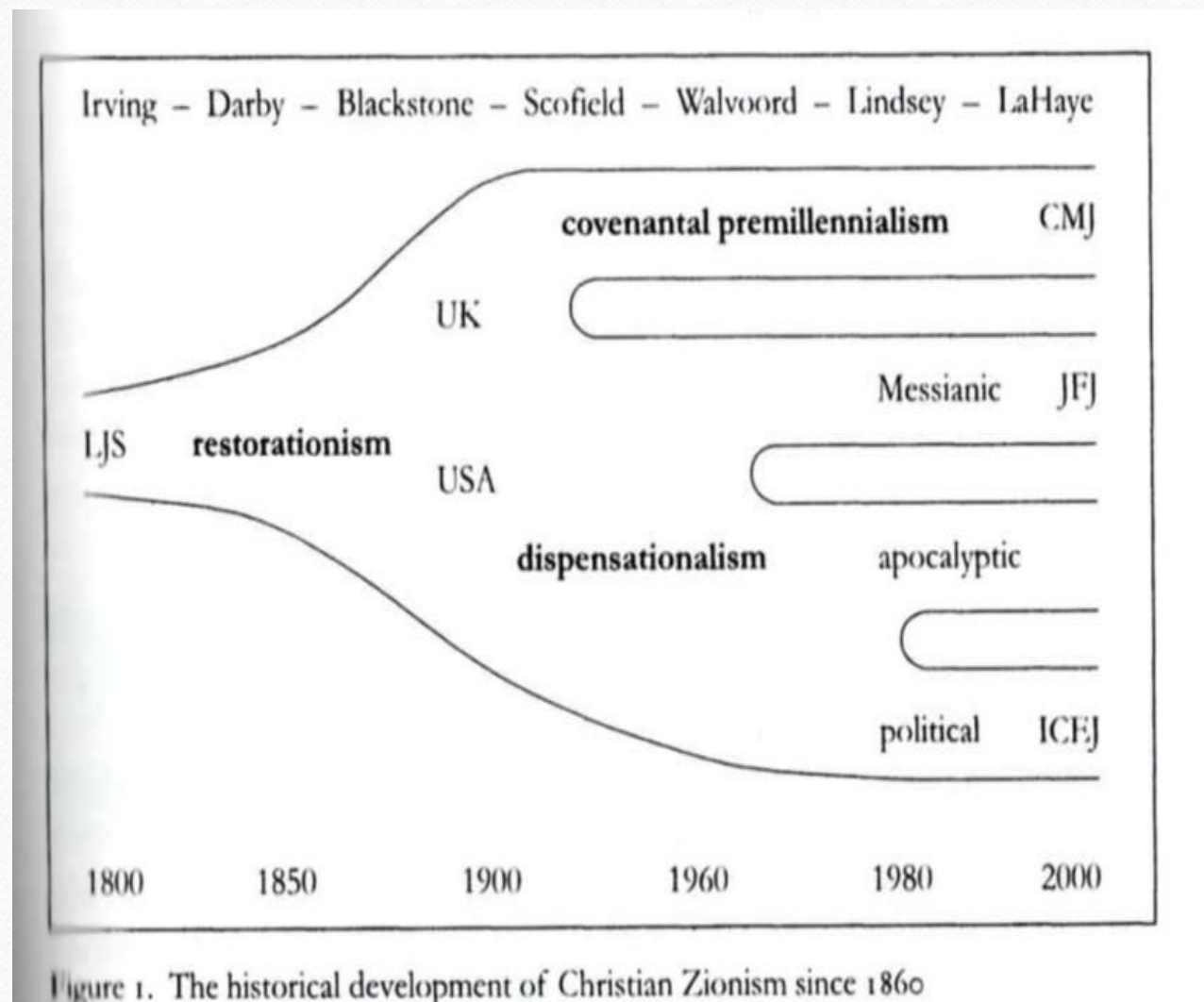
アーサー・ジェイムズ・バルフォア(1848-1930) イギリス外相

- バルフォアは福音主義の家庭で育ち、シオニズムに共感。歴史を、「神の目的実現の道具」と見なしていた。1905年からはマンチェスター大学の化学の教授であったハイム・ワイツマン(初代イスラエル大統領)と定期的な会合を持ち、その目的を実現することを論じ合った。彼は歴史を「神の目的」を実現する道具と見なしていた。ワイツマンは、ウガンダやアルゼンチンといったユダヤ人の祖国の提案は、いずれも受け入れられないということをバルフォアに納得させた。
- 1916年、イギリスの戦時内閣外務副大臣のマーク・サイクスは、フランスのフランソワ・ピコとの間で、戦後のオスマン・トルコ分割についての秘密協定を結んだ(後にロシアも加わる)。
- フサイン＝マクマホン書簡...アラブ人独立の約束
→イギリスの三枚舌外交としてシオニストからの批判

バルフォア宣言

- 第一次世界大戦中の1917年11月2日に、アーサー・バルフォアが、イギリスのユダヤ系貴族院議員であるロスチャイルド男爵ウォルター・ロスチャイルドに対して送った書簡で表明された、イギリス政府のシオニズム支持表明。この宣言をアメリカシオニスト機構に伝えるようロスチャイルド卿に依頼した。
- イギリス政府の公式方針として、パレスチナにおけるユダヤ人の居住地(ナショナルホーム)の建設に賛意を示し、その支援を約束している。
- バルフォア宣言の原文では「ユダヤ国家」ではなく、「ユダヤ人居住地」として解釈の余地を残す「national home」(ナショナル・ホーム、民族郷土)と表現されている。

1860年以降のキリスト教シオニズムの歴史的発展 (スティーブン・サイザー)



キリスト教シオニズムの神学的特徴

- 聖書の無謬性を主張
- 聖書は預言の書であり、預言は実現される
- 字義的聖書解釈
- 一部の語句の拡大解釈
- ヨハネ黙示録の援用
- パウロのユダヤ人論の束縛

いわゆる聖書的根拠

- マタイ福音書2:39(オリーブ山の説教)
- 創世記12:3
- ローマの信徒への手紙11章
- テサロニケ I 4:13-18(携挙に関して)
- ヨハネ黙示録
- エゼキエル書
- その他

マタイ福音書23:39(オリーブ山の説教)

- 言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うまで、今から後、決して私を見ることはない。」
→ 「ユダヤ人がイエスを救世主と認めてはじめて、キリストの再臨がある」とする読み替え
- 拡大解釈の典型。エルサレムのユダヤ支配層に対する批判。彼らの悔い改めを迫っているのであって、キリスト再臨の条件とするのは誤り

創世記12:3

- あなたを祝福する人を私は祝福しあなたを呪う人を私は呪う。
地上のすべての氏族はあなたによって祝福される。」
- アブラハムの信仰に対する神の祝福である。
- 「すべての氏族」というのは、民族に関わりなく、信仰する者はすべて祝福されるということ。
- これを、「イスラエルを祝福する者は栄え、イスラエルを批判する者は滅びる」と解釈するのは、あまりにも強引な読み替えである。

ローマの信徒への手紙第11章

- 福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で愛されています。(11:28)
- 11章全体を通じて言われているのは、イスラエルは完全に退けられたのではなく、救いの可能性があるということ。こうして、異邦人(非イスラエル人)もイスラエル人も共に救われるというのが神の計画であるとパウロは主張している。

ヨハネ黙示録について

- ヨハネ黙示録は、全体として言えば、ローマ帝国を弾劾し、帝国による迫害の被害者の魂が神の許で癒され、祝福されるという「鎮魂の書」である。
- しかし、後にユダヤ至上主義の編集が加わり、意味が理解しづらくなっている。
- 例:7:4以下「私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。」
←→7:9以下「この後、私は数えきれぬほどの大群衆を見た。彼らはあらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやしの枝を手にとって、玉座と小羊の前に立っていた。」

参考図書

